広報ふくつ
2018 9
No. 164

福津ふしぎ発見

福津の「海の中道」と土手

市北部には昔、大きな入り海と「海の中道」がありました。やがて、入り海は土手によって埋め立てられ、塩田ができ、津屋崎千軒と呼ばれるようになります。

▲寛文土手の上に作られた直線道路

勝浦と津屋崎を結ぶ国道495号の西側の田園地帯は、江戸時代の初めまでは入り海でした。現在の西東区と梅津区は細い陸でつながっていて「海の中道」と呼ばれていました。

現在の塩浜区に勝浦塩田を作るため、1688年（寛文8年）に大石下のバス停から塩浜口までの入り海を横切る「寛文土手」が作られました。その後、塩浜口から津屋崎までの「千間土手」が作られ、末広区で大規模な製塩が始まりました。大量の塩を積み出し、各地からの帰り荷が集まったことで、流通の拠点となり、津屋崎千軒と呼ばれる集落ができました。今は、これらの土手は道路になっています。

◆　◆

来月からは、市内の認定ブランド「福津の極み」などを紹介するコーナーを始めます。

発行　福津市　〒811-3293 福岡県福津市中央1-1-1　☎42・1111（代表）
編集　広報秘書課
印刷　久野印刷株式会社

この広報紙は再生紙を使用しています。